圧送業者にして新進作家 服部泰平さん

私たちは応援します

ある時はコンクリート圧送工事で先端ホースをかつぎ、ある時はラブストーリーやミステリーを書き上げる、しかしてその正体は吉川興業の服部泰平さん。昭和５３年生まれの２７歳。追手門学院大学卒。２２歳「切手のない手紙」でデビュー、２５歳「誘拐の長い午後」で文芸社Ｕ―３０大賞受賞。今年は「ずっと逢いたかった。」で売り出し中。ブレイク間近な服部泰平さんにインタビューした。

服部　泰平氏

増田　作家を目指そうとしたきっかけとか動機は？

服部　もともと、授業の中で文章を書くのが面白いことだなというのが心の中にあったのと、物語的なものを創るっていうことをしたかった。大学４年生の時に書き上げた小説、「ずっと逢いたかった」の原型になった「切手のない手紙」を自費出版した。

増田　それが２２歳でデビューされたということ？

服部　そう。作者が本は作るけど、版元が流通はしますよっていう形態でデビューとなった。その後、版元さんとの関係がちょっとでき、書かせて頂いた。それがまあ、漫画家の江川達也先生の目に止まり、大賞を頂いた。それが実質的には商業出版という形の最初。

増田　それが「誘拐の長い午後」？

服部　はい。その後、割と評判が良かったので、どうや、ちょっと本格的にやらないか？という話があった。版元さんから新しいことをして行こうとコンテンツファンドっていうのを始めた。コンテンツファンドとは、本の売上を担保として、銀行からお金借りる。売上を担保にしたら売上をいやがおうでもあげないといけない。出版界で初めて立ち上げ、その第２弾に選ばれた。マーケティング屋さんにも協力いただき、今、どういう小説が受けるかという様な市場調査もした結果、色々書き直していって今回の作品「ずっと逢いたかった」になった。

増田　大学を卒業されてからポンプ業されたの？

服部　僕はもう高校くらいからバイト代わりにずっとしてた。一番気楽な業種です。

増田　へぇ～そうですか。

服部　ただ、フルタイムで働くと中々小説を書く時間を取れないので、実家もそうやし、慣れてるし、そのまま会社へ。従業員・両親の理解があり、わりと時間を作るように配慮頂いたり、楽な仕事に振り分けてもらったり、しんどかったら応援を頂いたり、非常にありがたい。今作家を目指すに当たって、メシを食っていくってことで言えば、何か就職してしまうというよりは有利だったし、やっぱりちっちゃい時から見てると愛着もあります。

増田　見てたらおとなしそうな感じじゃないですか？で、ポンプ業っていうとどちらかといえば気の荒い現場でしょ。別に違和感というかトラブルは無い？

服部　まあ、気のしれたところでやっているし。うーん、浮いてますけどね。（笑）

増田　なるほど。でもかなり力仕事でしょポンプ屋さんは。あのう、筒先なんか持たれる？

服部　持ちますね。あんまり誇るほど上手くは無いんで言えないけど、まあ一通りは。

増田　配管とか持って？

服部　やることもある。

増田　作家の収入は少い？

服部　また食べていくには全然という感じ。ポンプ業も厳しいけど作家、出版業界も厳しいぞって感じで。

増田「ずっと逢いたかった」を読ませて頂いて、縦軸として戦争を媒介として主人公の鳴海勝一さんと雪子さんとの死んでしまうけどずっと続く絆と、横軸で義純さんの家族が崩壊して、それが勝一と雪子の絆を通して再生していく物語という感じや、歴史と現代の世相を的確に表現した感じを受けた。

服部　もともと、祖父が戦争でいい思い出が無く、ちょっと、人生がおかしくなった人で、祖父が死んだ時期が僕の反抗期の一番真っ只中で、割と反抗ばっかりして。何か償いをしなければと思って書いたのが「切手のない手紙」だった。償いっていうと大げさだけど、戦争の事をもっと多くの人に伝えていくっていうのも一つの罪滅ぼしかなと。

増田　現代の人間は自分は何のために生きているか、社会とのつながりが希薄になってもがく。でもなかなか現実をつかめない焦燥感。そこで死っていう問題が、作中で自殺という形で出る。あるいは「誘拐の長い午後」の方は、主人公の先輩の刑事の奥さんが自殺する。現代の希薄感と死っていうのは服部さんにとって何か響くものがある？

服部　若い時っていうのは死から一番遠い距離にある段階ではあるけど、観念的には割と死っていうものが近いところにある。最近はネットで集まって自殺したり、ある種精神面では死が近いみたいなところがある。死っていうのを、冷静かつ描写として捉える時期なのかなというのがあって、割と死を作品に取り入れる。インターネット上の繋がりで一緒に死ぬ、そこから現代が見れるんじゃないかというところは僕の中にある。

増田「誘拐の長い午後」で、ハードボイルドタッチというか、女の刑事さんが出てきてトリックも面白いが、その基底にある乾いた感じが読んでて引き込まれる。

服部　ありがとうございます。割と僕はハードボイルドタッチっていうのが筆に合ってるというのもあるし、若い時そういうのを冷静に見ちゃってるところがあって。

増田　ミステリーのトリックとか日頃考えて？

服部　ポンプとかオペとかしてると、ミキサー車来ない暇な時がある。考えることがないなぁと言う時にはトリックとか考えてますよ。ミキサー車着いて「あ～」とか言って。割と現場では空想に飛んでるときがある。でもあんまり人殺す事ばっかり考えてたらそれはそれで危険かなと。（笑）

増田　なるほど。ところで、勉強してるなってところが結構あるけど。

服部　元々調べ好きっていうのもあって、苦になってない。小説って後々の努力でどうしようもないことがいっぱいあって、例えば文章力っていうのもそう簡単に上がるもんじゃないし、発想なんかも上がるもんじゃない。でも調べるのは一番努力が表れるところだし。読者さんへの誠意かなと。

増田　細部に真理が宿るって訳じゃないですが細かい所を丹念に調べないとリアリティでないですもんね。

服部　大げさに言うことでもないけど、一書くには後ろに十ないと。後ろに背景があり、支えている知識がある所まで調べないといけないんですけど。

増田　最後に、日本もだんだんと曲がり角に来てます。「戦争」ってことについてはどうお考えですか？

服部　うそくさいなとか言われても、現実味がないなと言われても、言ってたら済むのかって言われても、平和に、平和国家でいきましょうよっていう旗だけはあげとこう。旗を掲げてたら掲げてたなりの広がりが出てくるし。この青くさい旗でも掲げましょうよという気分ですかね。

服部　泰平さんの本

「誘拐の長い午後」

単行本
(2003/10) 文芸社
価格
￥1，470-

「ずっと逢いたかった。」

単行本
(2005/03) 文芸社
価格
￥1，365-